

◆昨年 4 月に到着してから様々なことが起こり、それらに振り回されてきたが、今は極めて平穏な日々を送っている。なにも無さ過ぎるくらいだ。食事や洗濯をし、coop に買いものに行き、行きつけの bar でコーヒーを飲み、sala borsa や図書館で翻訳したり、辞書を片手に本を読んだり、行き交う人に気楽に ciao などと声をかけ、気づけば辞書なしに街を歩いている。

変わってきたことと云えば、柔道場の若い連中の相談に乗ったりし始めたことだ。その内容は極めてプライベートなことなので、ここに書くわけにはいかないが、恋愛や人間関係、仕事や自分の人生における柔道の位置づけなどなど、このイタリア語が未だ不自由な外国人を捕まえて、色々と話してくれるのだ。時に電子辞書を間において、筆談ならぬ辞書談をしている。気楽に見えても、彼らも必死に自分の人生を考えていることが、真摯に伝わってくる。ときに涙が出そうになる時もある。家族の話などをされると特にそうだ。先日も話があると云われ車の中で約 1 時間、聞いて、励ますつもりで多少のコメントをしていたら、泣きだされてしまった。女性の涙にはお手上げである。落ち着くまで待っていたら、行き交う人たちが路上駐車中の車の中を覗き込むように通り過ぎている。何か少し居心地が悪い。もちろん彼女はその後立ち直って元気に帰って行ったが。たまにだが、別れ際に「パパの所に bacino を」と頼まれるときもある。パパの所(位置)とは額(おでこ)のこと。女性に頼まれることが非常に多い、というより女性にしか頼まれたことがない。つまり私は、彼ら彼女らにとっては「パパ(お父さん)」なのだ。確かにそんな年齢だ。仕方がない。

bacino と云えば、ようやく慣れてきた。こちらの文化では bacio(キス)は単なる挨拶だ。もちろん接吻(口と口)は別だ。頬に軽くするのは、日本的愛情表現とは全く無関係の、まさに形式的な単なる挨拶にすぎない。でも 50 歳でこの文化に入った私には非常に高い壁であったが、試練? を乗り越えて、ようやく出来るようになった。もちろん誰彼構わずではない。非常に親しいものにだけで、男性には頬をつけるだけ、女性には軽い小さな bacino をする。この様なことを恥ずかしげも無くここに書いてしまったからには、帰国したら毎日、わが妻にもしなければ…いけないのだろうか??職場でしてしまったら、セクハラで解雇になるのだろうか??気をつけなければ、習慣とは恐ろしいものだから。

◆形式的に、まさに形の上だけ私が所属しているのは法学部の Antonio Cicu 法学研究所だ。しかし火事の影響で未だに使えない。イルミナーティ教授も、研究所ではなく学部の自分の研究室に閉じ籠もったままだ。これでは、おそらく帰国まで全く使用できないことははっきりしている。専門の国際法の書籍は、いつのまにかロッシ教授の部屋に運び込まれていた。女性の日本という国際私法と EU 法の先生なのだが、こちらに来る前にメールを送って、他の先生に回されてしまったので、どうも苦手意識が働き、未だに挨拶にも行っていない。これからも行かないだろう。よく見ると、研究所は他にもある。法学・政治学関係と思われるものをあげると以下のようだ。

1.Biblioteca del Dipartimento di Scienze Giuridiche “Antonio Cicu”

2.Biblioteca della SPISA-Scuola di Specializzazione in studi sull'Amministrazione Pubblica

3.Biblioteca del CIRSFD-Centro Interdipartimentale di Ricerca in Storia del Diritto, Filosofia e Sociologia del Diritto e Informatica Giuridica

4.Biblioteca del Dipartimento di Discipline Giuridiche dell'Economia e dell'azienda

5.Biblioteca dell'assemblea Legislativa della Regione Emilia-Romagna

これらの中で Antonio Cicu が法学関係で最も一般的かつ包括的な存在なのだが、むしろ私の研究傾向を考慮するなら、CIRSFD の方が良かったかもしれないと、今になって思ってしまう。でも、どちらにしても現在の語学力では、素晴らしい書籍や資料があったとしても読んで理解することなどできなかったろう。語学に関しては、渡航前の十分過ぎるほどの準備の必要性を痛感している。今度生まれ変わる時があれば(などと考える時期ではないが)、語学準備だけは怠らないようにしよう。

これには極めて不純?な動機も含まれている。若者の(と言っても 30 代や 40 歳近くも含まれているが)、その相談役あるいは単なる「嘆きの壁」役であったとしても、彼ら、彼女らの生の声を聞けるのだ。英語だけで過ごしていたなら、やはり表面的な付き合いで終わってしまっていただろう。「Ci tenevo lo sapessi e ci tenevo che questo fosse chiaro.」の動詞 *tenere* の使い方など、普通の文法書などには出ていないのだ。これが実際の現地の人たちの生の表現なのだ。ちなみにこの意識は「どうしてもそのことを知っておいてもらいたくて、はっきりさせておきたかったの。」である。ちょっと文章表現ばいが、それでもこんな言葉、若い女性から涙声で言われたなら、胸が熱く苦しくなる(だろう、という想像だが)。しかし情けないことに、これを最初に聞いた時には、意味が理解できなかった(もちろん、いつもの直観訳で何となくは分かったつもりだが)。云った本人はそれですっきりしたかも知れない。しかしこちらは、しばらく調べたり知人に聞いたり、と苦労してしまった。

このようなことを、ここに書いていること自体、私がいかにこちらでまったく勉強していないかを告白しているようなものだ。勉強や研究に没頭していたなら、このような余裕?はなかったに違いない。しかし、帰国まで残り約 2 ヶ月になってしまった。いまさらジタバタしてもしょうがないと開き直っている。

◆仕事とはいつも同時期にやってくるものだ。日本からの大学院関係の仕事がどっさり来た。1 月末までに仕上げなければいけない。と思っていたら、1 月 30 日に、お世話になっている柔道場で、イタリア各地から学生柔道家たちが集まって試合をするとのこと。試合後に大御所が色々コメントをして一つの教育活動にしているのだ。そこでいつもの師範が、試合終了後夕食があり、その後に柔術のデモンストレーションをお願いできないか、と申し込んできた。これはしばらく前に云われたので引き受けていたが、ようやくスケジュールが決まったというので見せてもらったら、私のデモンストレーションのために 2 時間も確保してある。しかも 21 時から 23 時という遅い時間だ。さらに後半にはディスカッションがあるから、よろしく頼むと云われた。ディスカッションで何をするのか?と聞いたら、私のデモンストレーションを土台に、色々な質問が出るから、それに答えてもらいたいという。質問に対する回答は、特に問題はないが、最大の問題はイタリア語である。最近ようやく発音や単語あるいは文章を聞き取ることができるように

なったのだが、それがあらかず意味が分からないのだ。つまり質問されても内容が分からないということだ。これには困ってしまい、どうしようかと考えていたら、友人である女子柔道家が「通訳してあげる」と申し出てくれた。でも彼女はイタリア語しかできない。そうなのだ、一般の生のイタリア語を、外国人である私にも理解可能なイタリア語に変換してくれるというのだ。もう彼女に頼るしかない。どうなることだろう。とりあえずデモの中身を考えなければ。

◆しばらく、デモンストレーションの内容を考えて、あれこれ色々な人に相談していたら、一寸した学会発表のような形になってきた。

つまり、PCのpower pointを使用して白い壁に文章や写真・図などを映し出し、その説明をする。その後実際の実演であり、最初に棒術を、次に武州伝気楽流柔術という甲冑柔術を、そして天神真楊流という素肌（甲冑なしの）柔術の演武をしてから、質疑応答に入るという具合だ。合計で38本である。それぞれ組む相手を替えるが、私はすべて行うことになる。結構大変だ。



天神真楊流柔術初段居捕「真之位」



天神真楊流柔術手解「片胸捕」



武州伝気楽流柔術表手捕「鯉の滝登」

そこでイタリア人が知りたいのは、それぞれの流派の *filosofia*（哲学?）である。柔道関係者なので、嘉納治五郎先生が最初に「精力善用・自他共栄」という（普遍的?）哲学を作り、その普及手段の一つとして柔道を用いたという経緯から、その大本となった柔術にもきっと何かあるに違いない、と思っているらしい。しかしもともと格闘技術である。演繹的方法で作成されたわけではなく、帰納的に作り上げられたのだ。もちろんそこには現代社会にも通用する考え方やモノの見方などがある。それをイタリア語に翻訳しなければならないが、一文ずつ読めば、特におかしくはないらしい。しかしその文を組み合わせると一つの文章を作成すると、どうしても発想や

思考の論理構造の差が明確に出てしまう。それでイタリア人は私の書いたものを読んで、内容や言いたいことは分かるけど、明らかにイタリア語の表現や構造とは異なる、といったものの見事に完全に書き換えてしまうのだ。しかも私が文章の最後に念押しのため結論を再度書き加えていたら、彼ら曰く、イタリア語では一度言ったことは二度と云わない（書かない）のだ、といったあっけなく削除されてしまった。そうなのだ、言葉が発せられた瞬間に物事が決着するのがイタリア語なのだ。こんな言語、面倒でやってられない。しかも何を言っているのか、しゃべっているイタリア人自身が途中で分からなくなることもよくあるらしい。さらに人の云う事を聞いていない。この国を変革するには言語変革からやり直さなければいけないのだろうか?つくづく日本語の美しさや素晴らしさを痛感する。もちろん彼らからすれば、イタリア語は世界一素晴らしく美しい言語なのだ。要は、慣れているかどうかだけなのだが。

◆ここしばらく Antonio Cicu を兼ねた図書館に通っている。この時期、学生たちがほとんど図書館に見当たらない。ゆえに閑散としてるので、私としてはとても使いやすい。入ってすぐの検索室のような大部屋に入るが、ここにも電源があるので、PCを持参したときに都合が良いのだ。

しかし、さすがに雪の降るような寒い日には、小さな温風機が頑張っているけど、部屋全体の空気を暖めるには程遠い。午後 3 時位になると、指先が冷えてきて、身体も寒さを感じざるを得ない。そうなるともう退出するしかなくなる。その足で Sala Borsa に行き、その 1 階にある bar で一休みして、奥の方のテーブルを探すというほぼ決まった行程である。



閑散としている午後 3 時。奥は貸出カウンター。

この日も図書館経由で Sala Borsa の bar に行き、小さな dolcetto を二つとエスプレッソ・コーヒーを注文、空いているテーブルに座って心地。いつも混んでいるのだけど、どうしてここに空席があるのか、と思ってすぐ隣の席を見ると、アツアツの熱愛中の二人がいるではないか。



Sala Borsa 内の bar で、外は寒くても中は暖かい。

皆その熱愛ぶりに当てられて、隣を空けていたのだ。鈍感な私は、何も考えずにそこに座って喜んでいただけだった。が、良く見ると、この二人、どう見ても男性同士である。そうなのだ、またしても別世界の境付近に身を置いてしまった。でも今回は私を先導しようとするものは誰もいない。自分の自由意思で、その席から離れられるという安心感がある。でも、誰かに見られているような気がしてならない。観察されているようだ。なんとなく不安になり、急いで *dolcetto* を頼張り、その *bar* を出ていつもの世界に戻った。まあ恋愛は自由だ。

◆1月30日のデモンストレーションが終わった。21時から開始のはずが、いつものようにグズグズダラダラでなかなか始まらない。几帳面な日本人である私は、腹が立ってきて、このデモンストレーションの主役が私であることを楯にとって、強引に開始してしまった。それでも21時30分である。若い参加者たちは、明日の柔道の試合に備えて、宿舎に帰ったものがほとんどで、残っている者たちは彼らを指導してきた師範連中が主であった。

出来は、即席にしてはまずまずであったろう。というよりも、私に協力してくれた女性柔道家の努力で *power point* がよくできており、彼女を含めて演武を行った者たちも、よく頑張ってくれたからだ。惜しむらくは、*power point* の説明の時に、もっと詳しくできる人であったらよかったのだが、道場の師範が行ったので、大切な哲学部分がほとんど飛ばされてしまった。仕方がない。彼の道場なのだから。

終了後の感想は、皆さん素晴らしいのだ、学べただの、色々とうれしことを云ってくれたが、今回は、最初の時間をロスしてしまったので、最後の質疑応答を行わなかった。終わりの時間も守るのが日本人である。ちょっと残念がっていた者もいたようだが、時間通りに初めて時間通りに終わることを学ぶ良い機会だったろう。でも変わらないだろうけど。

この演武が終わって、一気に気が抜けてしまったようだ。むしろボローニャあるいはイタリアでの大きな仕事が終わって、あとは帰国準備だけが残っているような気持ちになった。同時に、徐々に悲しみも湧いてきた。この準備のために一緒に作業をしてきた彼女とも、もう行うべき共同作業がない。一緒に稽古してきた彼らとも、一緒に行うべきことがなくなってしまった。彼らの生活はこれからも変わらない。ただ私という存在がなくなるだけだ。でも私にとっては彼らという存在がなくなり、ボローニャの生活がなくなり、ここの環境がなくなり、渡航前の日本の生活に戻るのだ。特にこのようなことを気にしない者も多いだろうが、決まった時間に決まった場所に行くとは必ず会える人がいて、一緒に作業をし、笑ったり悩みを聞いたり等々、時間と経験を共有していたのが、すべて全くなくなってしまうのだ。この喪失感は、思った以上に大きい。心に穴が空いてしまうほどだ。あのバスに乗り、あのバス停で降りて、公園を横切ると道場がある。あのバス停で降りて、あの *bar* の角を曲がって、あの *ristorante* の前を通り過ぎて、少し歩くと彼女の家があり、上から○番目の呼び鈴を鳴らすと、*chi e'*(どなた?)という声が聞こえる。このようなことが、目を瞑ってもありありと浮かんでくる。でも、私が感じているほどには、彼らは何も感じていないかもしれない。この街には外国人が多い。移民も多い。その中で暮らしている最中に、フラッと日本人がやってきて、約1年一緒に柔道場に通って、帰国して行った、くらいの思いかもしれないのだ。そして月日とともに忘れるのだ。こう思うと、悲しみも少しは緩和

される。これが最初の計画通りに Antonio Cicu 法学研究所で 1 年間研究をし、研究者仲間を作り、帰国したならば、その関係は研究という世界でまだまだ継続していたかもしれず、別れると云う感情はわかかなかったであろう。でも日本の私の生活と、こちらで深く入り込んだ生活(柔道場の連中との関係)は、全く接点がない。その意味で全く異なる世界に住んでしまったのだ。この世界から別の、本来の世界に戻ることは、ボローニャでの世界との断絶を意味する。何の関係も無い二つの世界を経験することなど、今までなかったことだ。その喪失感は、人生の半分を失ったのと同じ気がする。SF 映画ではないが、まさに接点が皆無なのだ。永遠に。しかし、どちらが私の本当の世界かを考えると、やはり戻らざるを得ない。E' la vita!(これが人生だ!)

あすから本格的な帰国準備に入ることにしよう。だから今晚くらいは、感傷に浸っても許されるだろう。私の手元には彼女が作ってくれた power point のファイルだけが残っている。

◆また雪だ。一度降ると最低でも 20cm は積もる。でもあまりベタベタはしていない。日本で冬用の上着をまとったとき、頭にかぶるフードが付いていることが多かったが、一度も使わずにいた。むしろ無駄ではないか、とも思っていた。しかしボローニャでは、フードなしには生活できない。サラサラした雪なので、傘などなくてもフードをかぶって街中を歩く人がほとんどだ。帽子をかぶってその上からフードをかぶる人もいる。傘は、フードなしの高級コートに身を包んだご婦人か、美容室の帰りの女性くらいが用いているだけだ。でも雪質が違うので日本では無理だろう。すぐに水浸しになるだろうから。



最近購入したオリーブオイルとチーズ。



また雪です。

さて、1 月も終わりだ。2 月になったら本当に帰国準備を始めなければならない。最近フト、この一年は何だったのだろうか、と思うようになった。未だに答えは分からないが。

(続く)